

□海外文献紹介□

Crohn 病の貧血

Anemia in Crohn's disease: *Gasche C, Reinisch W, Losch H, et al* (Dig Dis Sci 39: 1930-1934, 1994)

貧血は、Crohn 病でしばしば認められる合併症であり、エリスロポエチンによる治療が試みられている。インターロイキン 6 がエリスロポエチン産生を抑制し、Crohn 病患者ではインターロイキン 6 が高値であることに注目し、この関係について検討を行い、更にエリスロポエチン投与による治療効果を比較検討した。

49 人の Crohn 病患者について、

血中ヘモグロビン濃度、炎症の活動性、血清鉄、トランスフェリン、トランスフェリン飽和度、フェリチン、血清中のエリスロポエチン濃度を測定した。ヘモグロビンが 12 g/dl 未満を貧血ありとすると、49 人中 16 に貧血を認めた。貧血ありの群は貧血なしの群に比べ、フェリチン、オランスフェリン飽和度で有意に減少していたが、炎症の活動性とは有意差はなかった。また、エリスロポエチンとヘモグロビンには負の相関がみられたが、エリスロポエチンは貧血の程度に見合う十分量の産生がなされていなかった。エリスロポエチンとインターロイキン 6 に相関は認

めなかった。ヘモグロビンが 10.5 g/dl 以下でエリスロポエチンが正常範囲内の 4 人に対して、鉄剤の経静脈的投与が行われた。更に、このうち 2 人にはエリスロポエチンの追加投与が行われた。その結果、追加投与群は単独投与群に比し、ヘモグロビンが 2.5 倍上昇した。

以上のことから、著者らは、Crohn 病の貧血の病因の一因として、適切にエリスロポエチンが産生されないことと鉄欠乏があり、貧血の治療にエリスロポエチンと鉄剤の投与が有効であると述べている。

(愛知県がんセンター消化器内科

澤木 明 抄)